

2023年12月16日

team A 山崎 真紀

かながわのミュージアムは、ライフラインになり得るか

はじめに

インフラとは、都市の基盤となり、経済・産業を支える施設のことだ。
一方、ライフラインとは、生活にかかわるものの補給である。
ミュージアムは「生活にかかわるものの補給」という面で、ライフラインになり得るのではないか。
そこで、神奈川県『マグカル』という取り組みを紹介したい。
「文化芸術の魅力で人を引きつけ、地域のにぎわいをつくり出す、マグネット・カルチャー、略して『マグカル』」としている。：注1
情操という目に見えないものと、まちづくりという生活に不可欠なものを密着させる取り組みから、変貌していくかながわを考察する。

1. かながわランドデザインと『マグカル』について

神奈川県では、県政運営の総合的・基本的指針を示す総合計画として「いのち輝くマグネット神奈川」を基本理念に掲げ、2025年（令和7）を目標年次にして、2012年（平成24）に「かながわランドデザイン基本構想」及び「かながわランドデザイン実施計画」を策定し、2015年（平成27）には「かながわランドデザイン第2期実施計画」を、2018年（平成30）には「かながわランドデザイン第3期実施計画」を策定した。：注2

2025年（令和7）は、神奈川の人口が減少に転じていることが予測されると見据えて目標年次にしたという。

ただ、神奈川県は県の調査から、2023年1月1日現在で2年連続、県人口が減少したと発表した。「少子高齢化の進行で死亡が出生を上回る『自然減』が加速。転入が転出を上回る『社会増』で補えない状況が顕著」だという。つまり2025年（令和7）を待たずして人口は減少しているのだ。
：注3

さらに、新型コロナウイルス感染症の感染拡大等、昨今の国内外の予測し得なかった情勢から、先の基本理念を継承し、目標年次を2040年（令和22）に定め「かながわランドデザイン基本構想」を見直すことにしたとある。その中の、神奈川の4つの特色や強みの2番目に「くらしと調和する多彩な自然・文化」があり、2項目が挙げられている。それは「多彩な自然環境」と「歴史と文化」である。この「歴史と文化」とは、『各地域で育まれた様々な伝統や文化は、「まち」への誇りや賑わいを生み出す源泉となっている』としている。：注4

これが、人を引きつける魅力ある地域づくりの『マグカル』に繋がるのではと考えた。

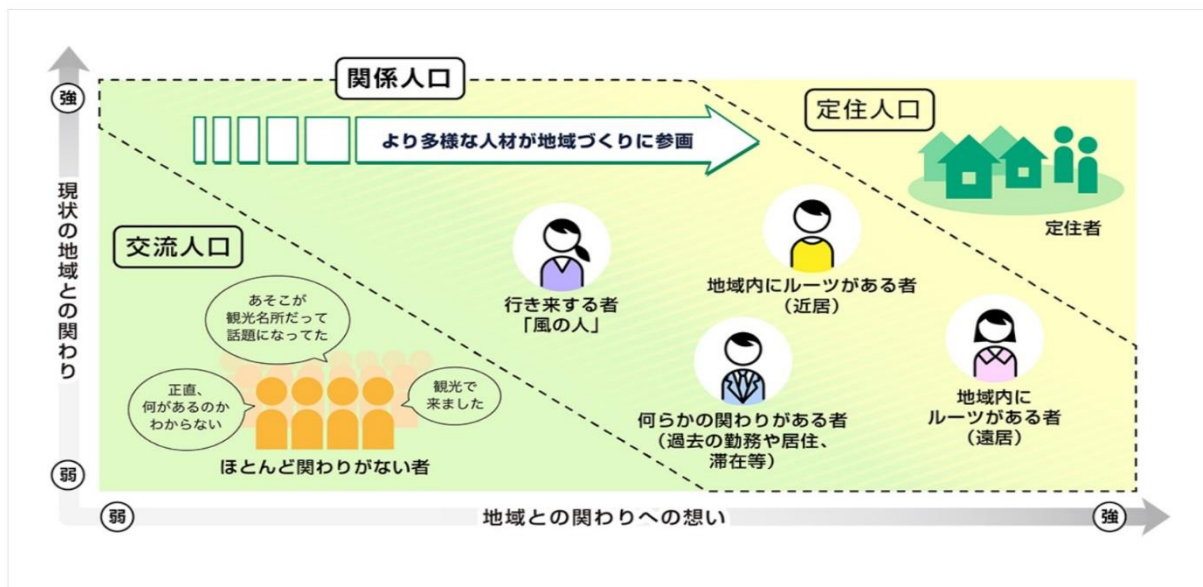
2. 関係人口について

「関係人口とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指す言葉」だ。人口減少・高齢化の加速により、地域づくりの担い手不足を、地域外の人材が補えるのではないかと期待されている。：注5

神奈川県では、真鶴町が「真鶴町ふるさと町民登録制度」を設けている。真鶴町に対する応援、協力、参加、または真鶴町の魅力をもっと存分に知りたいという地域外の人に「真鶴町ふるさと町民」になってもらい、町内の各施設について、町民と同様のサービスが受けられるようになる制度だ。

：注6

図①



出典：総務省「関係人口ポータルサイト」

これは、ミュージアムにおける「ボランティア」や「友の会」、単純にその場に魅力を感じ、度々訪れる人たちに応用できないだろうか。

3. 神奈川県のミュージアム

都心にあるようなミュージアムを、平塚市博物館の浜口哲一氏は「遠足博物館」と呼んだ。

「展示を見ることが利用の中心で、普段見られない珍しいものに出会うことができたり、日頃できないような経験が積めるといったように非日常的な楽しみがある博物館」のことだ。他方、平塚市博物館のような博物館を「放課後博物館」とした。そこは「何かを調べに行く、行事に参加する、ボランティアとして手伝いに行く、遊びに行く、そういう日常的な使い方をする博物館」であり、「ありふれたもの、今まで見落としてきたものに気づくとか、何げなく見ていたものに新しい意味を見つけるとか、そういう楽しみがある博物館」だとしている、そして「遠足博物館」と「放課後博物館」のどちらのほうが良いというのではなく、それぞれで「博物館の両輪」だと述べている。：注7

また、同平塚市博物館の栗山雄揮氏は、「開館以来、自他ともに「地域博物館」としての立場を明確にして」おり、地域博物館とは「①市町村規模の範囲の住民を対象とし、②住民が日常生活の中で繰

り返し訪れて利用することを前提として、③地域の資料や情報を収集し研究・蓄積して未来に伝える」としている。：注8 まさに、住民だれもが学生時代のように放課後を楽しめるということだ。

神奈川県立生命の星・地球博物館の大西亘氏は「地域博物館とは、地域にまつわるモノ・コトを集め、地域に発信するとともに、後世に伝える博物館であると同時に、地域住民が、日常的に集い、活動し、発信する“場”、特に地域における社会教育・生涯学習、あるいはまちづくりの“場”としての役割も期待されている」として、「『博物館ボランティア』や、当館の活動全体のサポーターあるいはファンクラブとも言える『博物館友の会』の会員（いずれも博物館の高頻度利用者である）の居住地は、博物館により近い地域に偏在する傾向にある（図2（上）、（下）。）」と述べている。：注9

図②

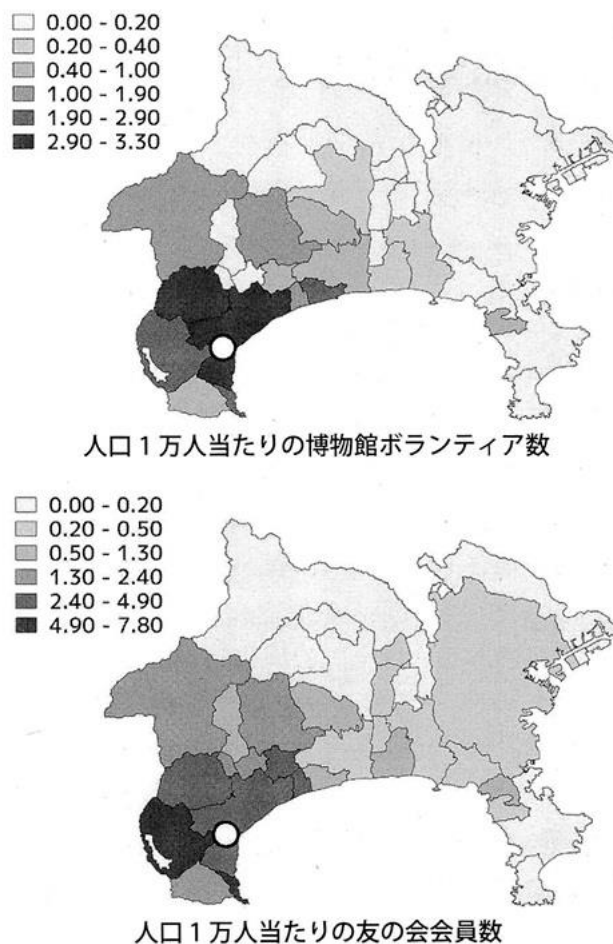


図2（上）県内自治体別、人口1万人当たりの博物館ボランティア数。（下）県内自治体別、人口1万人当たりの友の会会員数。

白丸の位置が当館の所在地。黒色が濃い場所ほど人数が多いことを示す。いずれも博物館により近い地域に偏在する傾向にある。地図は「国土数値情報」を元に著者が作成。

出典：自然史系"地域"博物館の役割-神奈川県植物誌の事例から-

神奈川県立生命の星・地球博物館 大西亘氏

ただ、自身の居住する地域に同様のミュージアムが無い場合、そもそも住民の数が減ってきている地域の場合、どうすればいいのか。そこで「関係人口」が増えたらどうだろうか。人を引きつける魅力ある地域をつくり「関係人口」を増やすのだ。

先ほどの図②を見ると、確かに神奈川県立生命の星・地球博物館のある地域は、ボランティア、友の会の数が共に多いが、友の会だけみると、寒川、海老名、座間、鎌倉、逗子、横浜も奮闘している。友の会とは、そのミュージアムに何度も訪れたいという思いや、そのミュージアムの力になりたいからと入会するものだ。ということは、これらの地域にあるミュージアムに、魅力（生活にかかわるものの補給力）があるからではないのか。

おわりに

横浜市で3年に一度開催する現代アートの国際展、第8回横浜トリエンナーレの会場として、現在休館中の横浜美術館が、来年2024年3月15日に再開館する。

横浜美術館は、コロナ禍の2021年3月1日より大規模改修工事のため休館していた。：注10

横浜美術館のある、みなとみらいの開発は、96%完了したとのことから「建設の時代」から「次のステージ」へ始動したと、今年発行されたフリーペーパーの「みなとみらい40thメモリアルブック」に記載がある。そこに「未来に向けた4つのテーマ」がある。その「ポイント03」に「ART & MUSEUM」とある。みなとみらいにあるミュージアムや点在するパブリックアートを巡り、新たな「知」や「気づき」と出会うきっかけを届けていくとしている。：注11

また、同じく今年発行されたフリーペーパー「MUSIC CITY YOKOHAMA 2023-2024」では、みなとみらいにある「びあアリーナ MM」を運営する、びあグループがコラムを寄せている。

SDGsの目標17項目には「文化芸術」について直接語られているものはありません。びあグループは、文化芸術はそれぞれのゴールに貢献する有効なツールであり、サステナビリティや今後の経済だけでなく、真の幸せを追求する時代の大切な要素として欠くことができないものであるという思いから、18番目の目標として「文化芸術を始めとして、エンタテインメント、スポーツの必要性」を掲げ、心豊かな暮らしと社会のための「文化」活動の強化・支援を提言します。コロナ禍で文化芸術が不要不急と言われてしまった日本の現状を変え、文化芸術を通して相互理解やコミュニケーションを深めることで、世界平和に貢献できると考え、その重要性を広く世の中に訴え続けていきます。：注12

ミュージアムは、時にハコモノ行政などと言われ、やり玉にあげられたりすることもあり、おそらく、内部の変化も必要なのだろうが、それを観る側、楽しむ側も積極的に気づきや学びを得ていくことで、心豊かになり、生活に必要な不可欠なものになるのだ。

2025年（令和7）は、神奈川県が人口が減少に転じていると予想された年だが、それとは別に2025年問題として、超高齢化社会に突入する年でもある。それは神奈川県も例外ではない。そんな人生100年時代を豊かに過ごす1つの手段として、ミュージアムは有効である。

かながわのミュージアムは、近隣住民には身近な場所として、地域外のものには、自然や歴史と親和性の高い場所に多くあることから、訪れると小旅行のような非日常的な気分にもなれる。

どちらも、生活にかかわるもの（心の豊かさ）を補給できる場所であり、ライフラインになり得るのではないか。

おわりのおわりに

今回の研究を通して、人口ひとつとっても、まだまだ知らないことが多くあると気づいた。

神奈川のミュージアムが、自然とこんなに隣り合っていることも知らなかった。

神奈川近代美術館の葉山館に訪れた際、海があり山がある、その周りの自然に感動した。

神奈川の自然はこの半世紀で変化があったのだろうか。これが次の問いだ。

参考文献

注1 神奈川県「マグカル（マグネット・カルチャー）」『神奈川を使いこなそう』

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/yi4/cnt/f530483/index.html>（参照 2023年12月16日）

注2 神奈川県「新たな総合計画の策定について」『神奈川を使いこなそう』

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/r5k/keikaku2024.html>（参照 2023年12月16日）

注3 カナロコ「神奈川県人口、2年連続減少 少子高齢化で自然減が加速」2023年2月1日(水) 23:31 <https://www.kanaloco.jp/news/government/article-966345.html>（参照 2023年12月16日）

注4 神奈川県「新たな総合計画「基本構想」骨子」『神奈川を使いこなそう』

https://www.pref.kanagawa.jp/docs/r5k/keikaku2024_kihonkousou_kosshi.html（参照 2023年12月16日）

注5 総務省「関係人口とは？」『関係人口ポータルサイト』

<https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html>（参照 2023年12月16日）

注6 神奈川県真鶴町「真鶴町ふるさと町民登録制度」『真鶴町』

<https://www.town.manazuru.kanagawa.jp/tokushu/1260.html>（参照 2023年12月16日）

注7 札幌市博物館活動センター「muse letter 放課後博物館へようこそ ～平塚市博物館の活動から～」2003年4月 No.15 P2

注8 神奈川県博物館協会「博物館の未来をさぐる」東京堂出版 2015年6月20日 P9、10

注9 大西亘「自然史系"地域"博物館の役割-神奈川県植物誌の事例から-」『神奈川県博物館協会会報第89号』2018年3月30日 P8

注10 横浜美術館「第8回横浜トリエンナーレ「野草：いま、ここで生きてる」」『横浜美術館』

<https://yokohama.art.museum/exhibition/yokotori-8th/>（参照 2023年12月16日）

注11 みなとみらい21地区着工40周年記念事業実行委員会「みなとみらいの「未来」にむけて、次のステージへ」『みなとみらい40thメモリアルブック』2023年10月27日 P8、9

注12 びあ株式会社「心豊かな暮らしと社会のために文化芸術・集客エンタメを「SDGs 18番目」の目標に」『MUSIC CITY YOKOHAMA 2023-2024』 P6